

焦れったいほど愛してる

目次

焦れつたいほど愛してる

5

番外編 言葉にできない……

273

焦れったいほど愛してる

プロローグ

「……カノ」

二月の寒い夜。

彼の広い胸に包み込まれ、小春の鼓動は痛いくらいに高鳴っていた。『カノ』とは、彼だけが呼ぶ小春のあだ名だ。名字の“加納”を省略し、そう呼ぶ。

「なによ……同情してんの……？」

ドキドキしていることを悟られたくなくて、咄嗟に口から出た言葉はひねくれてかわいげのないものだった。

小春と彼——一之瀬颯都は、ライバルのような、悪友のような腐れ縁だ。

そんな関係を十二年間続けてきて、今は同じ大学でデザインを学んでいる。

いつもなら売り言葉に買い言葉みたいに続く返事が、なぜか今日に限って返ってこない。だからだろうか……

「一之瀬の腕……あつたかい……」

気がつくのと、普段だったら絶対に言わないだろう言葉が小春の口から出ていた。

「……カノ」

「ん？」

「二人で……あつたまろうか……」

「……二人で？」

「うん……」

その言葉の意味がわからないほど子どもではない。

こんなムードでいつもと違う颯都の顔を見てしまえば、頑なに隠してきた心が動く……

「あつたかく……して……」

小さな声でそう呟くのがやつとだった。

颯都が、そつと小春の顎をすくい、唇を重ねる。誰かとキスするのは初めてだ。

重なった瞬間冷たく感じた唇は、すぐにほんわりとした吐息で小春の唇を温める。

繰り返されるキスの心地よさに、緊張していた気持ちがあぐれ胸の奥が熱くなった。

恥ずかしさと戸惑いでいっぱいなのに、かすかに感じる期待。

——もしかしたら、二人の関係を変えられるかもしれない……

初めて入ったラブホテルのベッドの上で、小春はチラリとそんなことを考えた。

一糸まとわぬ身体に、颯都が覆い被さってくる。しつとりと熱を持つ素肌が心地いい。

「今、やめろって言われても、無理だから」

「言わない……。そんなこと……」

室内は、外に比べると格段に暖かく居心地がよかった。

けれど室内の空気より、颯都の肌のほうがずっと温かく心地いい。

小春の頭の中は、すでに彼のことについてはいっぱいになっていた。

颯都の手に全身をまさぐられているのだと思うと、それだけでなにも考えられなくなる。

二十二年間、男女の色事とは無縁の生活を送ってきた小春にとつて、与えられる行為は全て初めてのものだ。でも恥ずかしさや戸惑いはあっても、イヤだとは思わなかった。

相手が颯都だと思うだけで、自分でも信じられないくらい気持ちが昂る。

「……………之瀬え……………」

自分がこんな甘ったるい声を出すなんて考えたこともなかった。

恥ずかしい……。だけど、颯都が小春の反応を喜んでいるのがわかった。

だから小春は、必死に彼から与えられる行為を受け入れる。

肌に唇が這う気持ちよさに全身が震え、やがて快感に変わっていく。

けれどそれは、颯都が小春の中に入ってきた瞬間、霧散した。

「……………痛いか……………?」

気遣うようにかけられた言葉に返事はできなかった。全身をこわばらせ、覆い被さる颯都の腕を

強く掴む。

「痛く……………な、い……………。大丈夫……………」

小春は、なんとか言葉を絞り出す。あまりにも見え透いた嘘ではあったが、正直に言つてこの時間が終わってしまうのがイヤだった。

どんなに痛くても、こうした形で颯都を感じられることが嬉しい。

でも、長年張り合ってきた関係が災いして、素直に自分の気持ちを伝えるのが照れくさかった。

しかし小春の気持ちなど、つきあいの長い颯都にはお見とおしだったようだ。

彼は苦笑して小春の前髪を撫で上げ、涙でうるんだ目を見つめてきた。

「素直じゃないな……………。こんなときまで」

「う……………うるさ……………」

いつもの調子で反論しかける唇を、颯都の唇がふさいだ。チュッと吸い上げながら、ゆっくりと腰を動かし始める。

「んっ……………ウ……………」

喉の奥でぐもった呻き声上がる。自分の中を緩やかに擦り始めたモノに怯え、無意識に彼の腰を内腿で挟み込む。

だが、それで彼の動きが止まるはずもなく、かえって抜き挿しの幅が大きくなったような気がした。

「ハア……あつ、あつ……」

窮屈な蜜路を擦られるたび、全身にゾワゾワツとした熱い痺れが走る。ますます力が入って震える太腿を、颯都が宥めるように撫でた。

「力、少し抜いて……」

「あつ……無理……んっ」

「抜かないと……俺も、きつい……」

少し辛そうに、颯都は眉を寄せる。自分のせいで彼が辛くなるのはイヤだ。そう感じた小春は、力を抜く努力をする。

そんな彼女を愛しげに見つめ、颯都は唇を重ねた。

すると、なんとなく先程より痛みが軽減したような気がする。

「うん、いい感じ……。おまえ、身体は素直だな」

「ちよっ……それって、どういう意味……ああっ！」

いきなり、ぐぐつと小春の奥まで突き挿れられて大きな声が出た。

「やつ……あ、いっぱい……っ……」

おなかの中が圧迫されるみたいなの、今までに感じたことのないきつさ。

まさに、自分の中が、いっぱいになったような気がした。

「いっぱいにしてるの、俺だぞ。わかってるか？」

「あ……わ、わかつ……んッ、あつ、一之……瀬っ……」

苦しいほどの充溢感に、自分が破裂しそうな錯覚に陥る。小春は無意識に首を左右に振り喉を反らした。

颯都は露わになった小春の首に吸いつきながら、ゆっくりと胸を捏ね回す。

「んっ……あ……あつ、やあんッ……」

「ほんと、いつもこのくらい素直だといいのに……」

「うっ……うるさっ……ああつ、やつ……あ、胸……んッ……」

「そうしたら……、もっとかわいい」

「一之瀬え……ダメえっ、……あっ！」

胸の突起を指の腹で押しつぶされ、捏ねられる刺激に大きな声が出る。そのせいで颯都がなにを言ったのか、ハッキリと聞き取れなかった。

「カノ……、気持ち良くなってきたか？」

「わ……わかんない……ああつ、やあ……あ……」

こらえきれず、小春の口からは甘ったるい声が出てしまう。その声に興奮したのか、颯都の腰の動きがさらに激しくなった。

「あつ……や、やあつ……、一之……瀬っ……、やあ……あんっ……」

徐々に身体が痛み以上に快感を覚えていく。

初めて感じるそれを、どうしたらいいのかわからなくて、小春は颯都に抱きついた。

「……………之瀬え……………やっ……………あつ、ああ……………こわ、い……………ああっ！」

しがみつく小春をしっかりと抱き返し、颯都は腰を打ちつけ続ける。

やがて、乱れる呼吸がひとつになり、お互いを深く感じ合った。

「……………小春……………」

耳元で囁かれた颯都の声に、心臓が破裂しそうになる。

この十二年間、彼からこんなふうにな前で呼ばれたことはなかった。

颯都はいつも、小春のことを『カノ』と呼ぶ。ふざけてそれ以外の呼びかたをすることはあつて

も、小春と呼んだことはない。まして、こんな蕩けてしまいそうな声で呼んでくれたのは初めてだった。

「一之瀬え……………」

幸せな気持ちは泣き声さえも甘くする。

初めての痛みを忘れるような、とろりとした陶酔とうすいの中、小春は口にしたくても素直に言えない言葉ことばを心の中で呟く。

（……………好き……………）

流されるように過ごした夜ではあつたものの、小春に後悔はなかった。

十歳で出会ってから、ずっと密かに想い続けてきた相手。

ライバルで腐れ縁——そんな関係が仇あだとなり、ずっと気持ちを伝えることができなかった。もしかしたら、そんな二人の関係になにか進展があるかもしれない。小春は颯都の腕の中で、そうなることを期待した。

だが——それから一週間後。

颯都はデザインデザインの勉強のためイタリアへ旅立ってしまった。

小春になにも告げずに……………

そして、あの夜芽生えたかすかな期待は、結局叶うことはなかった。

「お電話ありがとうございます。蘆田デザイン、デザイン部コーディネーター課の加納です」
小春が電話に出ると、すぐさまクライアントの明るい声が聞こえた。

『加納さん？ よかったわ、いらっしやって』

この声のトーンは悪い話ではない。小春は、クライアントの情報を思い浮かべながら明るい声を出した。

「こんにちは、高田様。本日はどうされました？」

蘆田デザイン株式会社。

主に住まいのトータルコーディネーター、リフォームなどを手がける会社だ。

大学を卒業して五年。小春はここでインテリアコーディネーターとして働いていた。

「……そうですか、安心いたしました。では、お伺いする日時が決まりましたらご連絡ください」
丁寧に受話器を置いて、小春はふうつと息を吐いた。

ウェーブのかかったセミロングの髪を片耳にかける。

仕事柄人に会うことが多いため、髪型にもできるだけ気を遣うようにしていた。とはいえ、忙し

過ぎてろくに手入れもできていないのだが。

(そろそろ美容院に行かないとダメか……)

そんなことを考えていると、後ろからポンツと肩を叩かれた。

「お疲れー。今の電話、高田さん？ 壁紙のカビの件、どうなった？」

振り返ると、同僚のインテリアコーディネーター南田晴美が立っていた。

一七〇センチを超える長身の彼女の横には、小柄な清水沙彩がくっついていてる。彼女は、この春
コーディネーター課に配属された唯一の新入社員だ。

晴美は、二週間前に配属された沙彩の教育係になっていた。

小春はくると椅子ごと回って、晴美たちに身体を向ける。

「うん。エタノール処理と専用の塗料で様子を見てもらっていたの」

「ほとんど日も当たらなければ、風通しも悪いっていうのも原因だったんでしょう？ メンテナン
スでなんとかなかった？」

「何度かケアして、カビが出なくなっただって喜んでくれた。湿気がこもる時期はなるべく除湿して
くださって説明したわ」

「よかったじゃない。ひと安心だね」

「凄いですねえ、小春さん。あの奥さんが泣きながら会社に乗りこんできたときは、どうなること
かと思いましたよ。貼り替えたばかりの壁紙にカビが生えるなんて不良品を使われた、とか、訴え

てやる、とかすっごい怒ってたのに」

沙彩が両手を胸の前で組み、尊敬の眼差しを小春に向ける。

すると、なぜか晴美が自慢げに胸を張った。

「小春はね、アフターフォローが細かいのよ。覚えておきな、新人っ。インテリアコーディネーターはね、家具やらカーテンやらを選んであげられるだけが仕事じゃないんだからね」

「はいっ、先輩っ」

威勢のよい新人教育を見ながらくすくす笑っていると、再び電話が鳴った。小春は素早く受話器を取る。相手は今話していたクライアントだ。

「わかりました。では、本日も伺いたします」

明るい口調で返して受話器を置く。その様子を見ていた晴美が、眉を寄せた。

「ねえ、今日って、夕方から新規のクライアントとのヒアリングが入ってなかった？」

「んー、……大丈夫だよ。今からだったら約束の時間には間に合うと思うし」

小春はパソコンの時計と自分の腕時計を確認し、頭の中でこれからのスケジュールを組み立てる。移動時間を考えると少々きついが、渋滞に巻き込まれたりしなければ問題ないだろう。

「小春さんって、なんか分刻みで仕事してるって感じですね」

沙彩が驚いたように口にする。

「当然でしょー。小春はね、この蘆田デザインでナンバー1の成績と指名率を誇る、人気インテリ

アコーディネーターなんだからね」

「凄いですよねえ、他のデザイン会社や大手の建設会社からも依頼がきてますよねえ……人気者ですよねえ……」

そのとき、すぐそばから椅子のキャスターを派手に鳴らして立ち上がる音が聞こえた。

「あんなの、壁紙を新しく貼り替えたら済む話だったじゃない。部屋を綺麗にするためなら、お金を惜しまないクライアントだったんだから」

そう言ったのは寺尾美波だ。彼女は、持っていたカラーチャートをボタンと閉じ、他の資料と一緒に大きな鞆かばんに押しこんでから、小春たちのほうを向いた。

「先方は、新しいのに貼り替えてくれて言ったんでしょ？ それをわざわざ補修して様子を見るなんて手間のかかる方法を取るから、何度も足を運ぶことになるのよ。そんなことばかりしていたら仕事にならないわよ。加納さん」

言葉だけなら小春を心配してくれているようにも聞こえるが、今のは明らかに嫌みだろう。

「ありがとうございます。気をつけます」

小春は当たり障りのない返事をした。すると、美波がツンと顎あごを上げて見下ろすように笑った。

「加納さんは、あくせく走り回って顔を売るのがお得意みたいだね。でも、もう少し上手くやらないと、新しい仕事を受けられなくなっちゃうわよ？ 困るでしょう？ 人気者なのに」

美波は鞆を肩にかけると軽く手を上げてオフィスを出ていく。

この場には他のコーディネーターや社員もいたが、皆一様に呆気にとられ、美波の背を見送った。そんな中、小春と仲のいい晴美は、一言文句を言わずにはいられなかったようだ。

「もとはといえ、このクライアント、寺尾さんの担当じゃない。それを、面倒くさがって小春に押し付けたくせに」

「それは違うわ。クレームが来たとき、たまたま寺尾さんがいなくて、対応した私がそのまま担当しているだけ」

「押し付けたようなもんじゃない。メンテナンス案を見た途端、『そんなにやりたいなら加納さんがやればいいわ』とか言ってるさ」

「きつと小春さんがお客さんに人気があるから、嫉妬しているんでしょうねえ」

新人がサラッと口にする。すかさず晴美から頭を押さえつけられ、沙彩は、「きゃんっ」と叱られた子犬のような声を上げた。

少し前まで、蘆田デザインのトップコーディネーターは美波だった。

彼女は、華やかで豪華なコーディネートを得意とし、あまりお金にうるさくないクライアントにはとても人気がある。その人気は今も続いているが、クライアント全員がそういう人たちばかりではない。気づけば、小春の依頼数が彼女を上回るようになっていた。

「いつも晴美先輩が言ってるみたいに、寺尾さんも結果を出している小春さんを見習ったらいいのに」

怖いもの知らずの新人の口は、なかなかふさがらない。

ため息をついた晴美が声をひそめて言った。

「無理無理。小春と寺尾さんじゃ、クライアントに対する姿勢自体が違うもの。小春は、どんな相手にも、細やかなヒアリングと相手の環境に配慮したプランニングを提案する。さらには、かゆいところに手が届くと言われるアフターフォローが持ち味。寺尾さんはどっちかっという金額も依頼も大きいものが得意でしょ。引き渡しちゃえばアフターフォローもあまり要らないような。……まあ、合理的といえれば合理的だし悪くはないんだろうけど……。スタイルは真逆だよね」

「自分と逆なのに人気があるから、よけいにライバル視してるんですね」

「沙彩ちゃん、そんなことないから……」

とはいえ、美波が小春を敵視しているのは確かだ。人には合う合わないがあるので仕方がないと思うけれど、あからさまに敵意を向けられるのは勘弁願いたい。

まして同じ職場で働いているのだから、今のようないい声を出した。

小春は、微妙な雰囲気打ち消すように明るいい声を出した。

「じゃあ、ちよつと出てくるね。急ぎの電話が入ったら連絡して」

必要な資料をそろえて鞆かまに入れ、パソコンの電源を落とす。

「わかった。直帰になる？」

「うーん、わからないけど、新規のヒアリングが長引かなければ一度戻ると思う。あとで連絡入れ

るから」

「了解っ。いつてらっしやい、加納先生っ」

「もう、やめてよー」

晴美とふざけ合いながら鞆かばんを手にとると、ちょうどオフィスに来ていた総務課の新人が駆け寄ってきた。

「加納さん宛です」

そう言つて三通の封書を差し出され、お札を言つて受け取る。

「じゃあ、いつてきます」

封書を持ったまま手を上げ、小春はオフィスを出た。

「いつてらっしやい」

背後に沙彩をはじめとしたスタッフたちの声を聞き、エレベーターホールへ向かう。

小春はエレベーターを待つあいだにざっと受け取った郵便物を確認した。

一通はメーカーに頼んであったサンプルの請求書。もう一通はクライアントからだ。

宛名は大人の字だが、封書の裏に「コーディーネーターのおねえさんへ」と子どもの字で書かれている。今仕事を進めているクライアアントの夫婦には、この春小学校に上がったばかりの娘さんがいた。

とても人懐なつっこく、初めてヒアリングで顔を合わせたときから小春に懐いてくれていた。

気づけば自然と笑みが浮かぶ。しかし、三通目を確認した途端、その笑みが怪訝けげんなものに変わった。

「これ……以前にも……」

小春はその場で三通目の封を開いた。

四方を囲む蔦つた模様が浮き出し加工されたお洒落な封筒で、差出人はPPデザインとある。中には、封筒と同じく四方に蔦のデザインが施ほどこされた便箋びんせんが一枚入っていた。

その内容はスカウトの打診。いわゆる、ヘッドハンティングだ。

「興味ないって……」

一ヶ月ほど前にも同じものが届いていたのを思い出す。センスのいい封筒だったので記憶に残っていた。小春は便箋を封筒に戻し、三通まとめて鞆に入れる。

ハアと息を吐き、ちょうど来たエレベーターに乗り込んだ。

引き抜きの打診をされるのは初めてではない。今までも、数社からそれらしい話をもらったことがあった。

けれど、会社に不満はない。仕事もやりやすいし、人間関係も良好だ。今の小春にこの手の話を考える余地などなかった。

能力を買ってもらえるのは嬉しいことだ。しかし、正直なところ、自分はまだそれに見合うような人間ではないと思える。

「イタリアで成功した、あいつに比べたら……」

不意にその姿が脳裏に浮かび上がる。いつでもシャツと背筋を伸ばして歩いていた颯都。

彼と小春は、同じ大学のデザイン専攻科で常にトップ争いをしてきた。彼の自信に満ち溢れた笑顔はいつも明るく、それを見ていると自分も負けずに頑張ろうと思えた。

——カノ！

ふいに自分を呼ぶ颯都の声がよみがえり、小春はハッとする。

急いで思考を切り替え、開いたエレベーターのドアから外に出た。

あれからもう五年も経ったというのに、未だにふとしたことで颯都を思い出してしまふ。

彼のことを考えると、どうしてもあの日の出来事がよみがえってくる。

——五年前。

あの日は、大学の卒業制作発表をかねた全国空間デザインコンクールの結果発表だった。コンクール常連入賞者の颯都が不参加ということもあり、小春は大学の期待を一身に受けて参加していた。また小春自身もその期待に応えるだけの自信と手応えを感じていた。

けれど結果は、直前になって参加を決めた颯都が満場一致の大賞受賞。小春は彼の思いもかけない奇抜なアイディアに完膚なきまでに打ち負かされてしまったのだ。

そしてその夜、落ち込む小春を颯都は抱いた。

あの夜からどれだけ考えただろう……

どうして彼は自分を抱いたのか。

そして、なぜ小春になにも告げずイタリアへ行ってしまったのか……

イタリアに行くのが決まっていたのなら、あの夜、彼はどんなつもりで自分を抱いたのだろう。

（会えなくなるなら、連絡くらい欲しかった……。あの夜、二人の関係に進展があるかもしれないと思ったのは私だけ？）

しかし、イタリアから届いた一枚の絵葉書を見て、漠然とその答えを察した。

淡い光の中で、ゴロゴロ転がるトマトの写真に書かれた、短いメッセージ。

【俺も頑張るから、おまえも頑張れよ！】

颯都らしい言葉にクスリと笑みが零れ……。同時に涙が出た……

『一之瀬の……バーカ……』

結局、彼にとつて小春はライバルであり友人でしかなかったのだ。身体を重ねたことにも、深い意味などなかったに違いない。

もしかしたら、本当に冷えた身体を温めるのが目的だったのではないかとさえ思ってしまう。

『……本当にバカだ』

流れる涙を拭い、ズキズキと悲鳴を上げる胸の痛みに必死に耐える。

——颯都がイタリアで頑張るなら、友人として、自分は日本で頑張ろう。

小春は絵葉書を用意すると、颯都に返事を出した。

【頑張るよ、当たり前でしょう！ 負けないからね！】
そうメッセージをつけて……

——それから一年に二回、春と秋に颯都から絵葉書が届くようになった。
相変わらず、メッセージは一言だけ。

【頑張ってるか？】

【過ぎちゃったけど、誕生日おめでとう！】

颯都から絵葉書が届くと、小春もすぐに返事を出した。

【頑張ってるよ！】

【イタリア生活一年だよ。よく続いているね、すごい！】

【日本語忘れちゃってない？】

本当は、もっとたくさんいるいる書きたかった。

就職したデザイン会社で頑張っていること。仕事のこと。大学で一緒だった仲間のこと……

けれど、それを書いたら、寂しがつっていると颯都に思われるかもしれない。仕事が辛いんじゃないか。もしかしたら、颯都に会いたがっているのではないか。そう思われるのが、なんだか嫌だった。

そうして五年。一度も会うことなく葉書だけのやりとりが続いている。

イタリアの颯都は、今では新進気鋭のインテリアデザイナーとして注目を浴び、日本でも何度か

メディアに取り上げられる有名人になった。

友人として、彼の活躍を素直に嬉しいと思う。

ただ……

こうしてときどき過去を思い出しては落ち込む自分が、未練たらしい人間のように思えて重たい
め息が出てしまう。

外に出て、すっきりと晴れ渡った空を見上げる。春の陽射しが目に眩しい。

「もう……四月の中旬か……」

毎年、四月になる前に届く颯都からの絵葉書が、今年はまだ届いていない。

なにかあったのではないかと心配したものの、雑誌の記事で、彼が独立することを知った。

きつとその準備で忙しいのだろう。落ち着いたら連絡がくるかもしれない。

そう思っただけでも、つい颯都はもう自分に絵葉書を送ってこないのではないかという不安が生まれる。

「……いい年して……」

思わず自嘲の笑みが浮かんだ。

どんなに割り切ったつもりでも、未だに自分から葉書一枚出すことができていない。
意地を張ったまま、好きの「ず」の字も言えなかった十二年間。

たった一度重ねた身体は心の突破口にはならず、彼への未練を強くしただけだった。

——いつまでたつても、彼を忘れられない。

小春は、ただの友人に戻ることも、素直に想いをぶつけることもできない自分を、もどかしく思った。

その日、仕事を終え小春が自宅マンションへ戻ったのは、二十一時を過ぎた頃だった。

五階建ての1LDKマンション。その五階に小春の部屋はある。

縦長のスペースに、パズルのように部屋をはめ込んだ造り。玄関を入つてすぐに十五畳のLDKがあるのが気に入っていた。

食事の仕事も、帰つてきて即座に始めることができる。この部屋のリビングは、もう一つの仕事部屋みたいになっていた。

「ただいまあゝ」

小春は一人暮らしなので、当然返事はない。

はあっと大きな息を吐き、資料が詰まったシヨルダーバッグとともにソファへ倒れ込む。

思っていた以上に身体が重く、このまま眠つてしまいたくなくなった。

(疲れ、溜まつてんのかなあ……)

だが、予想外にヒアリングに時間を取られてしまったため、今日の分の仕事をまだまとめられていなかった。

その他にも、今日中に見ておかなくてはならない資料がある。

……なにより、メイクを落とさずに眠るのはダメだ。

「翌朝てきめん、肌に出るのよね……。曲がり角だからさあ……」

自虐的な言葉は、自分で口に出す分には気にならないものである……

小春はソファに横になつたまま、郵便受けから無造作に挿挿んできたものを確認し始めた。

ダイレクトメールが三通。その一通一通の送り主を確認しながら、あいだに葉書が挟まっていな
いか確かめる。

……我ながら諦めが悪い。

「よっ！」と勢いよく起き上がり、手紙をテーブルに放った。

ビールでも飲んですつきりしたいところだが、まずはお仕事だ。

嘆息して立ち上がると、壁側のデスクに近づきノートパソコンの電源を入れる。

外出中、携帯に課長から新しい仕事についてのメールがきていた。

おそらく小春が担当することになるから、先に資料を小春のパソコンへ送っておくとのこと
だった。

「ハウスメーカーの委託かな……。それとも新築とか……」

新規の仕事で指名を受けた場合、いつもだったら現在受け持っている仕事のスケジュールとの相
談から始まる。

こうして勤務時間外にわざわざ資料を送ってくるということは、すでにこの仕事を受けるのは決定事項なのだ。

となると大手ハウスメーカーの委託案件か、単価の高い新築だろう。

どんだん受信される新着メール。その中に【新案件お願いします！】と張り切ったタイトルを見つけ、メールを開いた。

何気なく読み始めたメールだったが、徐々に小春の目が大きく見開かれていく。

まさか……

半信半疑でメールに添付されてきた画像を開いた。

そこに写るのは、少々古びたチャペルの外観。

「やっぱり、あそこだ……」

スタンダードな三角屋根と、正面の丸窓のステンドグラス。昔と変わらない外観が懐かしく、小春は長いことその画像を眺めていた。

「そっかあ……、新しくなるんだ」

さつきまでの疲れはどこへやら。気づけば、今日一番なくらい気持ちが盛り上がっていた。

小春に持ち込まれた仕事は、チャペルの改装に伴う内装のコーディネート。

外観から式場までを担当するメイデンデザイナーが、コーディネーターとして小春を指名したようだ。指名を受けるのはもちろん嬉しい。だがそれ以上に、小春はこのチャペルを担当できるのが嬉

しかった。

築二十年のチャペル会館。

結婚式から披露宴までを執り行うことが可能で、広い庭でガーデンパーティーもできる。

それなりに利用者も多かったようだが、オーナー会社が事業縮小のために手放し六年前に閉館されていた。

その後、どこかの不動産会社が買い取ったと噂を聞いたが、閉館した状態で今に至る。

「よかった。取り壊しにならなくて……」

チャペルを見つめたまま、ぼつりと呟く。小春の脳裏に、颯都の姿が思い浮かんだ。

このチャペルは、学生時代に駅へ向かう通学路にあった。そしてそれは、颯都も同じだった。

小学校から大学まで腐れ縁が続いた二人は、通学途中、かなりの高確率でこのチャペルの前で顔を合わせ、ときに並んで歩きながら学校へ通った。

長いつきあいの中で、二人は友だちを交え遊びに行ったこともある。そんなときの待ち合わせ場所は、必ずこのチャペルの前だった。

一緒に、本物の結婚式を見たこともある。

中学三年の春。いつものごとくここで颯都と待ち合わせをした小春は、偶然、結婚式のガーデンパーティーに行きあった。

チャペル会館の周囲はたくさんのお木々が植えられていて、中があまり見えなくなっている。

しかし、その日は正面入口が開いていて中がよく見えた。

好奇心から中を覗いた二人は、遠目に幸せそうな新郎新婦を目にしたのだ。

一緒に見ているのが颯都だったからか、とても胸がドキドキしたのを覚えている。

けれど、そんな自分を颯都に見られ、『なに？ おまえでも結婚式とか憧れたりするの？』とからかわれたら、と不安になった。彼に対しては、どうしても意地を張ってしまう。

ぐっと表情を引き締め隣の颯都を窺った小春は、そこで言葉を失った。

颯都はとても楽しげに結婚式の光景を見ていたからだ。

『誰かの幸せそうな顔って、いいよね』

『あ……うん、いいよね。こっちまで幸せになるし』

『こういう顔……させてやりたい……』

『誰に？』

何気なく言って、ハツとした。この状況で幸せな顔をさせてあげたい相手というのなら、それは未来の結婚相手に他ならない。

そのことに気づき、自分で言うとおきながら顔が熱くなった。

『や、やだなあ……、あんたも男だねえ。そういうこと考えるんだ？』

焦ったあげく、小春は颯都をからかかってその場を誤魔化そうとする。

すると颯都は、彼女のおでこをぺしと叩いて笑った。

『当然だろ。あんなふうに笑ってもらえる仕事ができたら、最高だろう』

『そっ……そうだねっ！ そ、それは私もそう思う』

彼が考えていたのは、将来の仕事のことだった。

なんとも颯都らしいと思いつながら、小春は話を合わせてアハハと笑う。

『だろう？ やっぱりおまえとは気が合うなあ』

よっぽど嬉しかったのか、颯都は小春の背をバシバシと叩く。

『よしっ、負けねーぞっ。どっちが先にそんな仕事ができるか競争な』

『わ、私だって、負けないからね』

売り言葉に買い言葉のような約束は、漠然とした将来に対する希望。

なにになりたい、これをしたい……

中学三年生の二人には、まだハッキリと決まったものがあるわけではなかった。

けれど……

誰かに幸せを感じて笑ってもらえる仕事がしたい。

それが二人の新たな目標となった。

そんな将来の希望を語りあった特別な場所。小春にとって、このチャペルは思い出深い大切な場所なのだ。

「目標は、達成したよね。私たち」

小春の口元が自然とほころぶ。

あるとき二人で立てた、誰かに幸せを感じて笑ってもらえる仕事があったという目標。

そろってデザイナーとなった二人は、なにもない空間をデザインし、コーディネートすることで、たくさんの人を幸せな笑顔にする仕事をしている。

小春はパソコンの後ろへ手を伸ばし、棚から葉書ホルダーを取り出す。

アイボリーの革貼りの表紙をクラシカルな飾りが縁取っているそれは、一見すると外国の古書のような。そこに挟まっているのは、颯都から送られてきた十枚の絵葉書。

絵葉書の写真は、花や野菜、キャンドルや星空、眠る猫など様々だ。

せっかくイタリアにいるのだから、イタリアの観光名所を写した絵葉書を送ってくれればいいのに、と思ったこともある。

けれど颯都のことだから、あえて日常の写真を使った絵葉書にしたのかもしれない。

遠い国にいることを感じさせないように……

年に二回、五年分の葉書は全部で十枚。一番新しいものは去年の秋に来た葉書だ。

【やっとやりたかったことができそうだ。報告を待っていてくれ！】

見ただけで張り切っているとわかるメッセージが書かれていた。だが、今年の分がまだ届かない。……忙しすぎて、忘れてるのかな

彼の言う、やりたかったことがなんなのかはわからない。だが、日本でも注目され始めている人

だ。きっと、小春には想像もできない大きなことなのだろう。

「薄情だぞ。こらっ」

葉書に書かれた彼の一言をピンツと弾く。しばらくそこを見つめていたが、小春はホルダーを戻し、再びモニターに映るチャペルの画像に目を向けた。

頑張っているのならそれでいい。

自分も彼に負けられないように仕事を頑張るだけだ。

翌朝、始業後のミーティングで、正式に課長からチャペルの改装案件が告げられた。

隣に座っていた晴美が、「頑張つてよー、小春センセー！」と言って肘でつついてくる。

納得の雰囲気広がる中、ただ一人不満の声を上げる人がいた。

「どういった基準で、加納さんが指名されたんですか？」

その一言で、ミーティング室の雰囲気を一気に凍らせたのは寺尾美波だった。

彼女は腕を組み、眉間にしわを寄せて課長に顔を向ける。

「ブライダル関連なら、ホテル部門も含めて私のほうがキャリアがあると思います。コンセプトからいっても、加納さんより私の専門のような気がしますけど」

確かに、ブライダル関連は高級感を得意とする美波の十八番だ。彼女の言うとおり、小春よりよっぽどキャリアもある。

自分の得意分野だと思っからこそ、美波は小春が指名されたことに納得がいけないのだろう。課長は困ったように苦笑いを漏らし、しきりに時間を気にしている。

そろそろミーティングを切り上げなくてはならない時間だ。

コーディネーターによつては、午前中にクライアントと打ち合わせが入っている者もいる。

「寺尾さんの気持ちもわかるけど、今回はデザイナーから直々に加納さんを指名されたんだよ」

「その担当デザイナーって誰なんですか？ どうせ、加納さん最前（びんき）のハウスメーカーでしょう？ 無理を聞いてもらいやすいつて理由で適当な指名をされたんじゃない、仕事がいやにくくてしようがないわ」

強硬な態度を見せる美波に室内の空気がザワツと動いた。

この気の強さと仕事に対するプライドは、彼女の優れたコーディネーターにも繋が（つな）っていると小春は思っている。とはいえ、できれば揉め事は避けたいのが本音だ。

(でも……)

小春はミーティングテーブルの上で組んだ手に力を入れる。

この仕事は、絶対に手放したくなかった。どんなことがあっても、あのチャペルの改装にかかわりたい。

「大丈夫……？」

なにも言わない小春を、晴美は心配したのだろう。気遣うように小声で尋ねられ、小春は小さく

うなずき、笑みを浮かべる。

そのとき、ミーティング室のドアがいきなり開いた。

「失礼。まだミーティング中でしたか？ あとどのくらい待てば、俺はコーディネーターと会わせてもらえるのかな？」

突然部屋に入ってきたのは二十代後半の長身の青年だった。

襟足（えりあし）にかかる少し長めの黒髪。ジャケットにジーンズ。中にはラフなシャツを着ていた。人によつてはだらしなく見えるスタイルだが、青年はまるでモデルのようにスッキリと着こなしている。その姿を見た瞬間、小春は息を呑んだ。

同時に課長が青年に向かって頭を下げた。

「ああ、お待たせしてすみません。もう終わります」

「おとなしく待っていていようと思いましたが、早く相棒に会いたくてね」

「ははは。これは随分と期待されているようだ」

課長は笑顔で小春を手で示した。

室内が大きなきわめきに包まれ始める。ここにいるみんなが、青年の正体に気づいたのだろう。

小春は目を見開き、青年を見つめたままゆっくりと立ち上がった。

すると青年は、足早に近づき……

「Caol! カノ！ 会いたかった！」

いきなり小春を抱きしめた。

「おまえの作品資料、全部見たぞ。凄いな、想像以上の成果を上げているじゃないか。パートナーはおまえしかないって確信したよ！」

「ちよ……ちよっ……」

「限られた空間に、クライアントの夢と希望を詰めこんでトータルコーディネートする。その完成度が素晴らしい。想像以上だ。やっぱりおまえのセンスは最高だよ！」

「……いつ、一之瀬っ！ どうしてここに!?!」

小春は焦りに任せて青年の名を口にする。離せとばかりに彼のジャケットを後ろへ引っ張ると、颯都はにやりと笑った。

「五年ぶり。——カノ?」

ドキリと、痛いくらいに胸が高鳴った。

カノ、と、颯都だけの呼びかたにゾクゾクッと全身が粟立つ。心臓が勝手に早鐘を打ち始め、今にも眩暈を起こしそうだ。

彼が……目の前にいる。

この五年間、ずっと忘れられずにいた、颯都が……

「……どうして」

なぜイタリアにいるはずの彼が、ここにいるのだろう。

聞きたいこと、言いたいこと、いろんなことが頭の中でぐるぐる回り、上手く言葉が出てこない。

口を半開きにしたままうるたえる小春の肩をポンッと叩き、颯都は室内を見回す。そして、右手を自分の胸にあて、爽やかな笑顔を見せた。

「Buon giorno! 今回、チャペルホール・フェリーチェのリノベーションを担当します。デザイナーナーの……」

「一之瀬颯都先生っ!」

颯都が名乗る前に、室内で驚きの声が上がった。同時にわっと拍手が沸き起こる。

イタリアで活躍する颯都は、新進気鋭の日本人インテリアデザイナーとして、国内の雑誌にも紹介されている。ここで彼のことを知らない者はいないだろう。

「私は今回のリノベーションを、とても楽しみにしていました。早くコーディネーターと打ち合わせがしたくて、つい乗りこんでしまいました。怒らないでください」

そう言っ、颯都は呆然とする小春に微笑み、その背をポンッと叩く。

「彼女が有能だということは皆さんご存じのとおりです。彼女をお借りすることで、きっと何十人ものクライアントが悔しがることでしょう。けれど、決して誰にも文句を言わせないものを完成させるとお約束します」

再び大きな拍手がミーティング室を満たす。

しかしそんな中、美波が席を立ち、颯都に近づいた。

「Piacere —— 一之瀬先生」

そう言って右手を差し出す美波に、颯都は笑顔で「Piacere mio」と両手でその手を取った。

颯都がイタリアへ行ったあと、少しだけだがイタリア語について勉強したことがある。

「Piacere とは、イタリア語で『はじめまして』。そして、颯都の Piacere mio は『いちごこそ、はじめまして』という意味だ。」

「ご帰国されているとは存じませんでした。日本へは、この仕事のために？」

「この春から、日本に個人事務所を構えたのですよ」

「そうなんですか？」

美波は驚いた顔をする。だが、隣で聞いている小春も驚いた。独立すると話題になっていたのを知っていたが、まさかそれが日本とは思わなかった。

（か……帰ってくるなら……、連絡くらいくれても……）

驚きつつ、つい不満が湧き上がる。同時に、葉書に書いてあった【やりたかったこと】とは、このことだろうかと思っただ。

「では、今回のチャペルのお仕事は、先生の帰国第一弾ということですね？」

握られた右手を左手で包み、それを胸にあてる美波の頬が、どことなく赤い。

それもそのはずで、彼については、世界が注目する若手インテリアデザイナーという他に、その優れた容姿にも注目が集まっていた。

昔から整った容姿をしていたが、イタリアへ行つて、それに磨きがかかったように見える。

それを証明するように、美波だけでなく、この場にいる女性全員が彼に見惚れていた。

「チャペルの改装については全面的に任されています。それで、腕のいいコーディネーターの目が欲しいと思い、今回加納女史を指名させてもらいました」

チャリと視線を向けられ、ドキツとする。しかし颯都を挟んだ向こう側から美波に睨まれた。

「もしかして、一之瀬先生と加納さんはお知り合いですか？」

「ええ。学生時代の同級生です。彼女のことは昔からよく知っているので、仕事もやりやすい」

「そうだったんですね。……ですが、人選ミスだと思えます」

「人選ミス？」

室内に緊張が走る。先程課長にぶつけていた不満を、今度は小春を指名した颯都本人にしようとしているのがわかったからだ。

「チャペルなどのブライダル関係は、加納さんの得意分野ではありません。先生も彼女の実績をご覧になったならおわかりかと思いますが？」

「実績？ ええ、見ましたよ。全て。穏やかで優しい空間を作るのが上手かった」

「チャペルという場所に、その感性は適切と言えないのでは？ ブライダル関係で求められるのは、華やかさや豪華さといった、女性にとって最高のイベントを盛り上げられる感性ではありませんか？」

「華やかで豪華……。それこそ、貴女の得意分野ですね。寺尾美波さん」
颯都の言葉に、美波が息を呑む。

おそらく彼は、小春だけでなくこのコーディネーター全員の作品を見ているのだろう。もちろん、美波の実績も把握しているはずだ。

颯都が自分のことを知っていたことに気を良くした美波は、満面の笑みを浮かべる。しかしその表情は、次の彼の一言で固まった。

「ですが、それを承知で、私は加納女史を指名しました」

室内のざわめきがぴたりと止まった。

微笑みを浮かべる颯都の言葉を、誰もが固唾を呑んで待つ。

「今回改装するチャペルを、貴女は直接ご覧になったことがありますか？」

「近くを通りかかったことなら……」

「それはおそらく閉館してからでしょう。普通に機能していた頃は？」

「いいえ……」

小春の脳裏に、過去の思い出がよみがえる。

二人で覗き見た結婚式。幸せに包まれた新郎新婦の様子は、参列者全てを笑顔にしていた。

「あのチャペルは、どちらかといえばナチュラルでアットホームな雰囲気売りです。そのため大切にすべきは、豪華さではなく、優しさや穏やかさです。——そう、たとえるなら、ローマの中心

部に建つ小さな教会のような。有名な教会の陰になっても、市民に愛され続ける場所。そんな素朴な温かさです。加納女史のコーディネートなら、それを再びあそこに取り戻すことができますと確信しているのです」

そう言つて微笑んだ彼に、ギュッと、心を驚掴みにされた気がした。

息を詰まらせ、小春はじつと颯都を見つめる。

彼が浮かべた微笑みは、二人で初めて結婚式を覗き見たときの笑顔に似ているような気がした。

颯都は握っていた美波の右手を引き寄せ、至近距離で彼女の瞳を覗き込んだ。

「ゴージャスなものを求めるのなら、このオフィスで貴女に敵うコーディネーターはいない。ただ今回は、求めるコンセプトが違うのですよ」

「そ……そうなんですわね……。それじゃあ、しょうがないかしら……」

颯都に見つめられ、美波は顔を上気させて落ち着かない様子で視線を彷徨わせている。彼女がそんなり納得したことで、室内に安堵の空気が流れた。

小春もホッと肩の力を抜く。そんな小春に、颯都が視線を向けてくる。

ドキリとした瞬間、親しげに肩を抱かれた。

「では早速、私とミーティングを始めようか。Signora」

五年前のことなど、なかったような態度。つい、ずっと悩んでいた自分はなんだったのだと思ってしまう。

同時に封印したはずの恋心が疼き出す。

小春は仕事だと自分に言い聞かせ、できるだけ冷静な態度を取った。

「加納です」

「ん？」

「私の名前は、加納、です、一之瀬先生。『シニョーラ』ではありません。それに、先程から気になっておりましたが、ここは日本ですよ」

事務的に言い放ち、小春は颯都から目を逸らす。テーブルに置いていた資料を持ってトントンとそろえると、胸に抱いた。

「それに私は未婚です」

シニョーラ Signora はイタリア語で既婚女性に対する敬称だったはずだ。

すると、颯都は、わずかに苦笑し言葉を改めた。

「失礼。——加納先生」

「先生、は不要です。私は一之瀬先生のような実績はありませんので」

「いいえ。デザイナー仲間、コーディネーターに仕事を頼むなら誰を指名したいかと聞けば、あがる名前の中に必ず先生の名前がある。ですから私は、敬意を込めて Signora と呼ばせていただきたい。未婚女性に使う Signorina は、小娘 と少々軽視する意味も含まれる。自立した素晴らしい女性には使いません。少なくとも、イタリアでは」

「ここは日本です」

もう一度繰り返して、小春は颯都の横を通り過ぎる。

「別のミーティング室を使いましょう。ご案内します」

「ありがとうございます。——と、お呼びすればいいですか？」

なんとなく皮肉を言われたような気がして、小春は眉を寄せさつさとミーティング室を出た。すると、背後で楽しそうな笑い声が起る。

「一之瀬先生、頑張ってくださいーい」

そんな女性スタッフの声が聞こえた。おおかた、颯都が手を振って愛想を振りまいているのだろう。

(なんか……、随分と軽い、っていうか、愛想のいい男になってない……?)

昔はもう少し真面目で堅い印象だったのに。

ミーティングルームから離れたところで、二人は同時に口を開いた。

「あんたさあ」

「おまえさあ」

二人は廊下の真ん中で顔を見合わせた。

「お先にどうぞ」

「おまえ、さっきのなに？ 敬称でつかかれたの、初めてなんだけど」

小春が先を譲ると、颯都は遠慮なく自分の疑問をぶつけてくる。二人きりになった途端、彼の口調はすっかり砕け、一瞬で昔の雰囲気に戻ってきたような気がした。

「別に間違ったことは言っていないじゃない」

「そりゃそうだけど……おまえイタリア来たことある？」

「あれくらい本とか見ていれば、雑学程度には覚えるわよ」

「ふうん……」

なにか納得しかねるといった感じの生返事。もちろん本当のことなど口にはできないまま、今度は小春が質問をした。

「びっくりした……。いつ、こっちに戻ったの？」

「一ヶ月前」

「い、一ヶ月前？」

小春は颯都に目を向ける。彼はちよつと困った顔をして、彼女の顔を覗き込んだ。

「もしかして、怒ってる？ 連絡のひとつも寄こさないでって」

「べ……別に怒ってなんかいいわよ。それより、……近いつ」

「なにが？」

「顔っ！」

先程美波にも同じような近きで話をしてしたが、互いの鼻がくつききそうな至近距離だ。

小春が一步後退して離れると、颯都は苦笑して背筋を伸ばす。

「本当に怒ってないの？」

「だから、なんで怒らなくちゃならないのよ。で？ この一ヶ月間、なにやってたの？ まさか観

光とかいうんじゃないでしょうね？」

「事務所とか、マンションの準備とか。荷物を整理したり、いろいろかな。気づいたらあつという間に一ヶ月経ってた。まあ、おかげである程度環境は整ったけど」

「事務所？」

「俺、葉書に書いたよな？ 『やっとやりたかったことができそうだ』って」

小春は黙って颯都を凝視する。

——やっとやりたかったことができそうだ。報告を待っててくれ！

思い返して、カッと頬が熱くなる。小春はそれに気づかれないよう、くるりと彼に背を向けて歩き出した。

「そ……そういえば、そんなことも書いてあったわね……。独立するって噂を聞いてたから、そのことかとは思ってた」

「そう。向こうであらかた準備を整えて帰国したんだけど、やっぱりいろいろと忙しくて。仕事の打ち合わせもびっしりだったし」

急ぎ足になる小春に反して、颯都はのんびりとついてくる。

それでもぴったりと横に並んで歩き、視線はずっと彼女を捉えていた。

「独立って、てっきりイタリアでオフィスを持つのかと思ってた」

「独立するときは絶対に日本で、って決めてたんだ。イタリアでのキャリアがあるから、仕事も取りやすいし」

「その様子だと、すでに鼻屑ひげにしてくれるスポンサーも付いてます、って感じね」

「ご名答」

「はいはい、先生、先生」

冷やかしても嫌みとも取れる口調で、小春は廊下の奥にある小ミーティング室のドアを開けた。先に颯都を入室させ、そのあとから入ってドアを閉める。

すると、顔の両側を颯都の腕に挟まれた。すぐ後ろに密着するような彼の気配を感じる。

「カノ……」

耳元で囁ささやきかける声にドキリとする。同時にピクリと肩が震えてしまい、そんな反応を見られたことに苛立ちを感じた。

「『おかえり』って、言ってくれないの?」

颯都の声が耳に近い。ドキドキと心臓が早鐘を打ち始め、身体が震えている気がする。

友人として、『おかえり』と、言って笑えばいい。『凄いね。イタリアで大活躍だったね』と言えばいいのだ。

——けれど、感情が理性を裏切る……

「……いつてらっしゃい、って……、言つてないもの……」

小春の口から出た言葉は、相手を詰なめるようなものだった。

「勝手にいなくなつたくせに。おかえりって言えとか、意味がわからない」

「やっぱり、怒ってる?」

「またその話? 連絡しなかったことは、別に……」

「俺が、カノになにも言わないでイタリアに行ったこと」

ピクリと肩が震えた。真後ろにいる颯都にも伝わっただろう。

「『勝手にいなくなつたくせに』っていうのは……怒ってるから使う言葉だよな?」

「揚げ足を取らないで。なにも言わなかったのは大学のみんなにも同じでしょ……」

別に今さら怒ってなんかいない。そう、言つてやろうとしたら、耳元に静かな声が落ちた。

「——ごめん」

その声音に、小春の動きが止まった。なんともいえない複雑な寂しさを含んでいたような気がして、胸がグツと詰まる。

「カノの顔を見たら、行けなくなるような気がした……。だから、イタリアで自分を磨いて、黙って行ったことをカノが笑って許してくれるくらい大きな人間になって帰つてこようと思った」

「……なつたじゃない……」

「うん……」

彼が耳元でクスリと笑みを漏らす。

「だから……こうして帰ってこられた」

ドアについていた手を離し、彼が小春の背後から離れる。

(ずるい……)

颯都の気配を背後に感じながら、小春は強く資料を胸に抱く。そうして抑えないと、高まる鼓動が相手に聞こえてしまいそうだった。

(そんなこと言われたら……怒れないじゃない……)

本当は会いたかった。声が聞きたかった。いつも彼のことを想っていた。

——だけど、自分と彼の想いは違う。

近くで椅子を引く音がして、彼が座ったようだった。

小春はなんとか気持ちいを落ち着かせ、颯都のほうを向く。

彼は腕を組んで椅子に座り、まっすぐに小春を見つめていた。

「カノ、本当に怒ってないの？ さっきから、なんか冷たくない？」

「冷たいとか、おかしなこと言わないで」

「だって、葉書の中のカノは、もっと俺に優しくかった気がする」

「葉書の中……」

「俺が出せば、必ず一言添えて返してくれただろう。絵葉書。この春は、忙しくしていたせいもあって葉書を出せなかったんだ。もしかして、そのことも怒ってる？」

探るような目で見られ、胸の奥が痛む。

しかし小春は、颯都にとつて自分は腐れ縁の友人でありライバルでしかないと知っている。だからあえて素っ気なさを装った。

「絵葉書？ ああ、そういえば今年はまだきてなかったっけ？ すっかり忘れてたわ」

小春は彼から目を逸らし、颯都の隣にファイルを置いた。

「本当？ カノはきつちりしてて細かいからさ、颯都くんつてば連絡くれないっ。ぶんぶんつとか怒ってんじゃないかと思ってた」

「なんなのよ、その怒りかた。中学生かつ」

「どっちかってえと、恋人からの連絡がなくて拗ねる彼女。カッコ仮^ずって感じ？」

「たとえば飛躍し過ぎ。あなたからの絵葉書は、見たらすぐ処理済みのレターケースに放り込んでたから、くる時期とか覚えてないわよ」

「そのわりに、いつもすぐに返事くれたよな」

「連絡もらったら、返すのが礼儀でしょ」

「俺は、もらった絵葉書、全部別にして取ってあるけど？」

言い返しかけていた言葉が止まる。

「一枚一枚、写真立てに入れてさ。寝室に並べて興奮してた」

「へっ、変態かつ！」

突拍子もない告白に、思わずムキになる。テーブルをバンツと叩いて颯都に顔を向けると、涼しい目に見つめられた。

クスツと笑った表情は、どこかすぐったそうに、嬉しそうに、小春に向けられている。

「興奮するだろう？ 葉書の文面からさ、カノが凄く頑張っているのが伝わってくるんだから。よし、俺も負けていられないって、意欲が湧いてきた」

なにも言えずにいると、再び颯都がにやりと笑う。

「こーんなあつたかい話なのに、なにを想像したんでしょうかー、加納センセーはあ。大人になるってイヤだねえ。なんだか変わっちゃって悲しいー」

「あつ、あんたねえっ」

小春はこぞとばかりに言い返した。

「変わったのは、あんただって同じでしょっ。なによ、さっきの態度は」

「俺、なんかした？」

「いきなり私に抱きつくわ、寺尾さんの手は握るわ、必要以上に褒めるわ。あんなことされたら、女はすぐ誤解しますよー、一之瀬センセー。イタリアでは普通かもしれませんけどっ」

(手を握ったり、顔を近づけたり……。なんなのよ、あれは。バーで女を口説いてるのは違うの

よ。やりすぎでしょう！)

「別に、おかしいことはなにも言っていないだろう？」

彼女の怒りをもともせず、颯都は椅子の背もたれに寄りかかる。顎を上げて、小春を見据えながら、心外だと言わんばかりに冷静な声を出した。

「全部本当のことだ。おまえのコーディネートが素晴らしいのも、寺尾女史のコーディネートが豪華に長けていることも。それを素直に褒めただけだ。人の良いところ、自分が素晴らしいと感じたところ、それを相手に伝えるのは悪いことか？」

「そんなことは、ないけど……」

「イタリアの男は、よく口が上手いと言われる。だけど、それは正直な感情を伝えているだけなんだ。美しいと感じたものや好きだと感じたものに対してストレートに感情を口にする。……感情表現が苦手な日本人からすれば、陽気で軽いと思われることが多いけど。……まあ、お国柄、つてやつだよな」

そんなふうに行われると、なんだか自分がとても失礼なことを言った気分になってきた。

「……一之瀬は、五年もイタリアにいたんだし……」

「うん？」

「感化も、されるわよね……。素直に人を褒められるのって、素敵だと思っ……」

「さすが！ 潔くて物わかりのいいところは、昔のままだな、カノ！」

勢いよく椅子から立ち上がり、颯都が小春に抱きつく。ハハハと笑いながら、彼女の背をポンポンと叩き、嬉しそうな笑顔を見せた。

「いやー、でも、美人になったな、カノ。メイクなんかして、見違えたぞ。あー、でも、ちょっとだけ肌が荒れてるかな？ 仕事忙しい？ 寝不足？ そうだ、これからホテルのカフェに行こう。お肌つやつやになりそうなサラダバーがあるんだ」

「ちよちよちよ、ちよいまちっ」

ぺらぺらと一人で話しまくる颯都を止めるべく、小春は行き場に迷っていた両手で彼のジャケットを引っ張る。

「なに言ってるの。これからミーティング。仕事よ、仕事っ」

「打ち合わせだろ？ 打ち合わせってのは、レストランとかカフェとか、もしくは相手を自宅に招いてとか、ゆっくりやるもんだ」

「それはイタリア式っ。ここは日本っ。打ち合わせはここですの」

「えーっ、でも俺、朝食まだなんだけど。腹減った」

小春を離し、颯都は笑顔を見せる。あまりにもあっけらかんと言われ、小春は目をぱちくりとさせてしまった。

彼の顔を見ているうち、なんとなくおかしくなってくる。変に気を張っている自分が、馬鹿らしくなってきた。

小春はぶつと噴き出し、声を出して笑い出す。

「なんなの？ もう、相変わらず自由過ぎるでしょ」

「カノが構えすぎなんだよ」

颯都の手が小春のひたいをべしつと叩く。そしてにつこりと笑った。

「なんか、やっつと昔のカノに戻ったな」

彼の言葉に、胸の奥がかすかに痛んだ。けれど、その痛みに気づかないふりをする。

私たちは友人だ。ならば、緊張する必要も、構える必要もない。

颯都に仕事のパートナーとして選んでもらえたことを素直に喜び、小春は自分の仕事をすればいいのだ。

小春は肩の力を抜いてポンツと颯都の胸を叩いた。

「チャペルの改装。パートナーに指名してくれてありがとう。嬉しかった」

小春が仕事の顔を見せたせいでだろう。颯都がにやりと笑う。

「この仕事を受けたとき、絶対におまえを指名しようと思った。——たとおまえが無名でも、なんだかんだと理由をつけて指名していたよ」

「一之瀬……」

「あのチャペルは、俺にとつて思い出の場所なんだ。……絶対に、いい仕事がしたい。カノの仕事ぶりを見て、パートナーはおまえしかないって、ずっと思っていた」

小春の鼓動が大きく高鳴った。学生の頃、互いに切磋琢磨せつさたくましていた気持ちを思い出す。あのチャペルに思い入れがあるのは、小春も同じだ。

だからこそ、絶対にいい仕事がしたいという想いは彼と同じ。

小春は片手で握りこぶしを作ると、振り上げた。

「頑張ろう。チャペルのリフォーム、絶対、一之瀬を唸うならせるようなコーデイナートをしてみせるよ」

その振り上げたこぶしを、颯都の手が包む。そして小春に顔を近づけ、嬉しそうに微笑んだ。

「良かった。昔のカノだ」

「一之瀬……」

小春から手を離し、颯都はテーブルに置かれた彼女のファイルを持つ。親指でクイットとドアを指し、ウインクした。

「さっ、打ち合わせに行くぞ」

「い、一之瀬？」

さっさとドアを開けて歩き出す颯都を、慌てて追いかける。彼は自信たっぷりぷりに断言した。

「今回の仕事は、リフォームじゃない。リノベーションだ」

「リノベーション……」

「やるなら、徹底していいものにした。そう思わないか？」

「思う！」

小春が間髪かはつを容れずに答えると、颯都が笑みを見せた。

原状回復を表すリフォームと違い、リノベーションは、より高品質高機能を目指す改装だ。

必然的に、チャペルは昔よりもより素晴らしいものになる。

「いい仕事をしよう、カノ。一緒に」

「もちろん」

自信に溢あふれた颯都の横顔を、小春は頼もしく感じて見つめるのだった。